

# Eureka X

六年制通信 No.27 令和4年11月25日(金)号

## 若いときの「今」

先日ベルホールで中3生に英単語の授業をしていたら **seize** が出てきたので、ついでに映画『いまを生きる』(この映画、原題は **Dead Poets Society** 「死せる詩人の会」なのですが、邦題の方が圧倒的にいいですね) に **Seize the Day** というフレーズが出てくることを紹介しました。これはラテン語の **Carpe Diem** (カルペディエムと発音します) の英語訳ですが、ラテン語の辞書では「今日の果実を摘みとれ」「今日を楽しめ」「汝の今を生きよ」と三つの訳語が載っています。映画ではロバート・ヘリックの有名な詩も読みあげられます。「gather ye rose-buds while ye may. できるうちにバラの蕾を摘みとりたまえ」から始まり、「今日は微笑むその花も 明日には枯れてしまうものを」と続きます。君たちは「ゴンドラの唄」は知らないかな。私らはすぐこの曲の歌詞を思い出します。**Carpe Diem** と **Seize the Day** とヘリックの詩はいつもセットで語られますが、もともとはホラーティウスの詩だそうで、しかし残念ながら私は確認できていません。

「いまを生きる」、このことの意味は君たちのような若者と私のような老人とでは違います。若者と老人では時の流れが違うからです。もちろん客観的に1日は24時間であることは誰にとっても同じです。また、楽しい時間は速く過ぎていき退屈な時間はなかなか終わらないといった体感も、若者であろうが老人であろうが変わりません。ただ、君たち若者はまだ社会に出ていない分だけ未体験のことが山のようにあります。ですから、これから先、私の何倍も楽しい時間が待っています。楽しみですね。あるいは、楽しいだけでなく切羽詰まった状況にいるときも時間は飛んでいきますね。それこそ矢のように。受験生で夏休みがあつという間に終わったと思わない人はいないでしょう。時間がない時間がないと思っていると、時間はあざ笑うかのようによく去っていくのですよね。こういう、あつという間に時が過ぎるといった感覚は人間だけが持つらしいのですが、神様がこの感覚を私たちに与えた理由は何なのでしょうかね。

また、年齢によって時間の感覚が変わるとは、よく言われていることです。若い時は1日が長く、歳を取るとあつという間に1年が過ぎていく。私も体感としてわかりません。今11月ですが、ちょっと前に入学式をしたような気がしています。あれから半年以上が過ぎたなんて信じられません。いわゆる「ジャネの法則」と呼ばれる理論によると、時間の感覚は年齢の逆数に比例すると、つまり10歳の子の1日は50歳の5日に相当するそうです。嘘みたいな理論ですが、いや、これ決して大げさな数字ではないように思いますね。そうすると君たちの1年は私の何年になるのでしょうかね。こわっ。

さて、そう考えると若い君たちにはたっぷり時間があるように思えるのですが、

油断してはいけません。やはり時間は過ぎ去っていくのです。「いまを生きる」、つまり今目の前のことに懸命になって努力する。君たちの1日の努力は、私の5日の努力に匹敵するわけですから、大きな成果が生まれるでしょう。しかし、そんな君の1日も決して帰ってはこないのです。同じ1日をもう一度手にすることはできません。

しつこいですが、若いときの「今」は文字通り宝物です。今の君たちの学びは、私たち老人が学ぶのとはわけが違います。例えば何か新しいことを私が勉強するとします。三か月くらいでは前後の差はほとんどないと思います、私の場合ね。しかし君たちが三か月も勉強すれば自分でも変化に気がつくのではないかと思います。ああ、筋トレと同じですね、きっと。私と君たちで筋トレを始めても、三か月後、私にはわずかな変化、君たちには大きな変化、それが勉強でも同じというわけです。時間の重みがまるで違うのですね。ところが厄介なことに若いうちは、あれもしたいこれもしたいと、やりたいことがいっぱいあります。しかし時間は、二つを同時にさせてくれないという性質を持っています。時間とは排他性が強いのですね。ですから自分のエネルギーを分散してしまうと、結局一つのことをマスターすることなく時間だけが過ぎていきます。自分の持つ才能がどれほどのものか、それは非常にわかりにくいものです。ですが、現在の目の前のことに集中すれば、確実に進歩していくことができます。若いときの「今」を大切に目の前の勉強に集中してください。全気全念で取り組むという表現がありません。すべての気と念を集中させるという意味です。頑張りましょうね。

#### 今週のおすすめ

・千野栄一 『外国語上達法』 (岩波新書)

1986年に出た本ですが、今でも新刊で手に入ると思います。千野先生は『言語学のためのしみ』に始まるエッセイ集が有名で、専門はチェコ語。チャペックの翻訳は広く読まれています。この『外国語上達法』は私の世代で外国語を勉強した学生はほとんど全員が読んだのではないかと思います。当時はそれくらい有名でした。この本の中には千野先生から見て「語学の天才」としか考えられない先生方が具体的なエピソードを交えて、しかし実名ではなくイニシャルで紹介されているのですが、その中の数人の先生は私も知っている（お会いしてなくても）くらい有名な方々です。

この本は中高生が読んでも、十分役に立ちます。語彙や文法の大切さなど、普通のこと書いてあるといえはその通りなのですが、非常に説得力があります。そして何とんでも「レアリア」について一章を設けているのが最大の特徴です。レアリアは英語で *realia* と書き（常に複数扱い）、辞書的な意味は「実物教材」となっていますが、千野先生は「言語外現実の世界」と言っています。「お茶」という単語 *a cup of tea* も言語によって、文化によって指すものが違います。また、民族が違えば生活の中で「お茶」がどのような意味を持つか、それらも変わってくる。いわゆる言葉を訳すだけでなく、背景となる文化や歴史を知らないと正確に言語を理解したことにはならない。外国語を勉強するにあたり、ここに注意を促した本は珍しいですよ。

BGMは ドリス・デイ のケ・セラ・セラ でした…。